一門の親和を強調した遺誡は、毛利家伝統の家風となった。

『異見があっても、それが協調の意見に発展的解消していった歴史の跡を辿ってみよう。』

(1) 慶安二年江戸城石垣の普請の件で本藩と徳山藩の意見の相違があった。

秀就と就隆との生い立ちの相違、性格の相違、秀元と就隆との関係において不愉快ないきさつ等で、徳山藩と宗藩、及び長府藩との間に関わる不愉快な感情は、容易に払拭されるべくもなく、これが後年徳山藩改易の問題を生ずる遠因ともなった。

(2) 徳山藩の改易

毛利元就の教訓状に想う

会員　清木　素

正徳五年（一七一五）の夏久米村万役山の松の木一本の盗伐事件から領界の論争を生じ、それが端緒となり、徳山藩改易の大事件にまで発展する。

善後策をもって元次に最後の説得を試みたが失敗に終わり、結局徳山藩は改易に処され、所領は宗藩に還付し、元次を新庄藩にお預けとなる。そして、嫡子百次郎等は宗家お預け、家中の者も宗家において適宜の処置をせよということになった。

硬派は、元次の存念を継ぎ、たとえ城を枕としても宗家の処置に反抗すると主張する。

穏健派は、百次郎を推して徳山藩の再興を図り、元次の難を救い、領民を安堵させようと主張した。

家中の論議は、硬軟両派に分かれて最良の策が決しなかったが、時のたつにつれて自ずから隠忍自重となり、宗家の要求に応じて屋敷の接収についても承諾した。

特に、奈古屋里人が血を吐く思いで認めた三通の嘆願書は、その署名にもかかわらず、誰もそれが百姓の手に成ったものとは信じなかった。里人を盟主とする一団の忠誠心以外の何物でもなかったという。再興の廟議が決定せられ、そのために再興後の宗支関係に少しのわだかまり残さなかったことは、元就教訓状の精神が永久に継承されていると言っても過言ではない。

(3) 鳴鳳館（徂徠学）と興譲館（朱子学）

天明五年（一七八五）の創立に係わる鳴鳳館は、その建築の美は他の学館に劣っていても、蔵書に至っては藩主特に元次公以来の蓄積により、経書・諸子百家・史類から字書・小説の類まで備わらないものはなかったという。

鳴鳳館時代は、徂徠学の採用によって古文辞学が尊重強調されていた。

五代小川乾山・飯田竹塢は、二人とも佐藤一斎の門人で陽明学派である吉村秋陽に学び、特に竹塢は直接一斎にも師事した。

天保年間以後、徳山藩学は大いに刷新され、徂徠学から朱子学とへ転向するに至った。そして、嘉永五年（一八五二）鳴鳳館を興譲館と改めた。

これは、大学の「一家仁なれば、一国仁に興り、一家譲なれば一国譲に興り、一人貪戻なれば一国乱を成す、その機かくの如し」から取ったものである。

興譲館での使用教科書には、鳴鳳館時代の「徂徠集」が詩文科用として使用されており、藩学は一学説のみに拘泥しない折衷論に傾いていたことが分かる。

(4) 鎖国と開国（安積艮斎と徳山藩士）

嘉永六年（一八五三）六月三日米艦渡来があり、徳山藩は九代元蕃の治世となり、毛利藩は相州浦賀方面の警衛を委託され、徳山藩もその一部を分担した。続いて国内の世論は、鎖国と開国の両派に分かれ、鎖国派は

攘夷討幕の実行へと発展した。

現状維持論と開国論に分かれ天下は騒然となる。幕府は京都御所の勅裁を乞うたり、全国各大名の外交意見の聴取を行った。全国からの提出は僅か六〇通で、そのうち開国論は一九藩、鎖国論は一三藩、折衷論は長州・徳山・土佐・二本松等一六藩であった。

六月九日、浦賀奉行戸田氏栄は、ペリーと相州久里ケ浜で会見し、米国大統領から将軍家慶に提出する国書・信任状を受け取る。返事は一応後日を約束した。

しかし、この国書・信任状を誰に翻訳させるかが問題であった。旗本で海外事情に通じている者は、将軍の学問所昌平黌の教授以外には見当らなかった。

そこで、安積艮斎が外国調役という大任を引き受け、第一通訳の堀達之助・名村五八郎、立石伝十郎などと協力して米国大統領の国書を先ずオランダ語に翻訳し、これを漢文に直し、更に和文に直すというわけで、約一ケ月を要して七月三日、艮斎が清書して将軍家慶に提出した。

ところが、七月一七日、ロシア使節プチャーチンが軍艦四隻を率いて長崎に来航、同じ目的を持ってロシア皇帝からの国書・信任状を提出した。

長崎奉行大沢豊後守は、このロシアの国書を受け取り、その翻訳には外国調役の安積艮斎と古賀茶渓があたり、通訳頭の森山栄之助もこれに加わった。

しかし、その当時の翻訳には参考書や辞典なども少なく、一字一句を翻訳するにもかなりの日時を要した。

安積艮斎は、陽明学の佐藤一斎の門人であり、保守論者河田廸斎・進歩論者佐久間象山（特に吉田松陰とは親交）・折衷論者が安積艮斎であった。艮斎には、毛利藩から一五人扶持（約二〇名）、徳山藩から五人扶持の月謝を払っていた。

徳山藩で艮斎の門人には、

①青木西峰～献功隊参謀・興譲館助教・徳山中教授
②庄原篁墩～帷を江戸に下し、子弟に授く。艮斎義弟
③本城素堂～元蕃・元功の近侍、興譲館教授
④小川官介～明倫館・艮斎・篁墩に学び興譲館教授

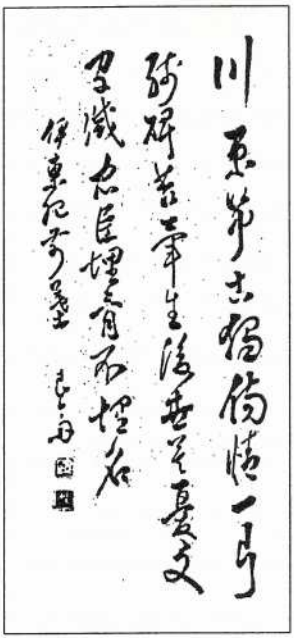
⑤江村彦之進～徳山略記編集、恭順派に暗殺

これら五人と本藩関係者六名と山口の山県太華の総計一二名となる。

なお、徳山では墓碑撰文をされている者が、浅見巣雲・阿米・本城太華と三名もおり、毛利藩内で艮斎との関係が如何に多かった事が分かり、恩師の折衷主義は門人にも大きな影響があったものと思われる。

また、昌平黌関係の毛利藩士七名の中にも三名も徳山藩関係者がいる。

このように、徳山藩士が、文教関係に如何に全国的視野に立って研修していたかがうかがわれる。



川原弔古独傷情　一片残碑苔暈生
後世莫憂文字滅　忠臣埋骨不埋名

この詩は、艮斎が仙台伊達家の忠臣伊東肥前守重信の碑を見て、彼を弔い詠じたものである。（郡山駅北寄りに現存）

(5) 徳山藩医学館―漢方医と蘭方医―

徳山藩の医学は、三代元次の時代に長沼玄珍が藩命を受けて京都に遊学し、これに次いで水津寿仙も京都にて医学を修業した。長沼家は、その後代々医を業とした。

八代広鎮の時、文政六年（一八二三）藩内の医師が他国に出て修業することは、患者の治療に支障をきたすとして、鳴鳳館内に医学館を併置し松岡玄知を医学取立方に任命したのが、藩校において医学教育を開始した最初であった。萩本藩より一七年も先立つものとして注目された。

初期の講義は、漢方医学が主であったが、萩本藩が蘭方医学の教育を開始すると、新たに蘭方医学を採用した。

(6) 徳山藩七士の殉難

―恭順派（俗論派）と主戦派（正義派）―

攘夷親征を奏請した文久二年八月一三日には、大和行幸を仰せ出され、国難の打開を祈らせられる予定が同月一八日佐幕派の策動が功を奏して、急に毛利藩は宮門の警護を免除され、革新派の公卿は失脚した。

この政変により、藩内では出兵論が大勢を占めるようになり、元治元年六月二四日に京都に到着した。ついに七月一九日戦端が開かれ、毛利藩は大敗した。そして、この変を契機に第一次長州征伐が発せられた。

そこで、毛利藩論は恭順・主戦の両論に分かれて紛糾し、恭順派はついに主戦派を弾圧した。

徳山藩においても、富山源次郎が宗藩の恭順派と志を同じうし権をほしいままにした。これに対して、河田佳蔵・児玉次郎彦・本城清・江村彦之進・浅見安之丞・信田作太夫・井上唯一らは、幕府に対し抗戦を主張した。

家中の諸士も多く両派に分かれて争ったが、元治元年八月九日の夜、佳蔵は同志と謀り富山の居宅を襲った。富山は、傷を負ったが逃れた。

恭順派は、これをきっかけに佳蔵ら七人を捕らえ、あるいは斬罪に処し、あるいは投獄してこれに凶手を加えた。

河田　佳蔵（享年二三）　児玉次郎彦（享年二三）
本城　清（享年四一）　江村彦之進（享年三三）
浅見安之丞（享年三三）　信田作太夫（享年四一）
井上　唯一（享年二三）

元蕃は、若くして散った殉難七士の家を復興し、そ

の遺族を優遇した。

また、三家老については、実権をとった恭順派は非常手段に訴えて主戦派を圧し、京都変動の責任者として三太夫に自刃を命じた。三太夫は、一旦徳山に禁固されたが、福原越後は元蕃の実兄にあたるので、他の二人と離して岩国へ護送した。益田・国司は一一月一一日、福原は一二日それぞれ自刃し、その首級を広島に送って総督の実検に差し出した。

(7) 徳山藩と宗藩・長府藩との関係

広鎮は、徳山藩の格式を城主格に進め、且つ、従来宗家から分封の公称石高参三万石を改めて四万一〇石とすることを認証した。

九代元蕃は、広鎮の七男で安政三年（一八五六）元蕃と改名、四人の兄は早世したが、庶兄元琦は宗藩の名家堅田就正の養子、同元僩は宇部の福原家を相続、弟の元徳は宗藩主敬親の嗣子となった。

従って、宗藩との関係は極めて密接となり、幕末多事のときに敬親と志を同じうし、共に国事に精励し藩政の刷新に功があった。嘉永六年ペリー来航以来、多難の国事に元蕃は宗家と共に相州浦賀の警備に任じ、宗家の進退に同調した。

元功は、長府藩元運の八男であり、その姉安子は宗藩敬親の養女として世子元徳夫人となり、兄元敏は長府藩を相続した。ここに、長府藩と徳山藩との緊密な関係が結ばれてきた。

これより先、敬親は薩摩・土佐・肥前の三藩主と連署して版籍奉還の議を奏請した。他の諸藩もつぎつぎにこれにならい、ついにこれが実現した。

元蕃は、改めて徳山藩知事に任ぜられたが、明治四年五月一五日これを辞し、徳山藩を廃して宗家の山口藩への合併を請願した。六月一九日これが許可され、徳山藩は廃藩置県の発令に先立つこと一ケ月にして、有終の美をなしたのである。

〔参考文献〕

。徳山市史　上巻

。安積艮斎